

## 5. 経営視点の改善

## 2

## 生産性の視点



## POINT

- 生産性向上の原動力は付加価値のアップと労働の効率化
- 現場リーダーの役割は人材育成と徹底したムダの排除

## (1) 生産性とは

わが国は今後数十年の人口減少の進行によって市場は縮小し、日本経済が減速すると言われていいる。すでに生産年齢人口は減少し、少子高齢化を背景に多くの企業の人手不足が深刻化している。そこで政府は生産性向上が火急の課題としてとらえ、2018年6月「生産性向上特別措置法」を施行し、生産性向上に取り組む企業、特に中小企業に対してさまざまな支援、税制優遇を実施することを定めた。

生産性とは、人や機械設備といったインプットの量に対する、売上高や付加価値といったアウトプットの量の比率を示す。労働生産性が高いということは、少ない投入量で大きな売上高や付加価値を生み出すことを意味する(図1)。

生産性指標	インプット要素
労働生産性	投入された労働量
資本生産性	機械などの生産設備の投入効果
全要素生産性	労働、資本などを含めすべて

## (2) 付加価値の向上による生産性向上

生産性が高いとは具体的にどのようなことをいうのであろうか。労働生産性の計算式「付加価値÷投入労働量」に着目すると、分子の付加価値が大きい状態であり、次のような要因が付加価値を大きくする。

- ・得意先、顧客の信用力が高い
- ・製品・サービスの品質面での競争力が高い
- ・製品・サービスの価格競争力が高い

その他、デザインがいい、使いやすい、スピード感があるなどが挙げられる(図2)。

つまり、顧客の信用力、高い品質、価格競争力により、顧客はライバル会社ではなく自社の製品・サービスを購入してくれ、その結果、得られる付加価値が向上する。

## (3) 労働の効率化による生産性向上

労働生産性は、計算式の分母の投入労働量を削減、効率化を図ることによっても向上する。具体的には、次のような方法が考えられる(図3)。

- ・技術力・スキルを伸ばす
- ・省力化を図る(IT、AI、IoTの活用など)
- ・ムダな作業・業務の削減

## (4) 効果的・効率的な生産による生産性向上

職場の中には生産業務の効率を妨げるさまざまな要素があり、ムダを生み出している。現場リーダーには、こうした要素を取り除くリーダーシップが期待される。たとえば、業務プロセスの改善や工夫による徹底したムダの排除、あるいは、多様な人材の育成・活用が期待される。

現場リーダーが生産性向上に取り組む10のテーマについて、次項以降に解説する(図4)。

- ①労働生産性とは
- ②5Sによる生産性向上
- ③トヨタ生産方式
- ④品質管理(TQM)
- ⑤設備管理(TPM)
- ⑥目で見える管理
- ⑦ボカヨケ
- ⑧不良低減
- ⑨設備総合効率
- ⑩ICTによる新しい工場・仕事

図1 労働生産性

$$\text{労働生産性} = \frac{\text{アウトプット (付加価値額または生産量など)}}{\text{インプット (労働投入量 [労働者数または労働者×労働時間])}}$$

図2 付加価値向上の要因【例】

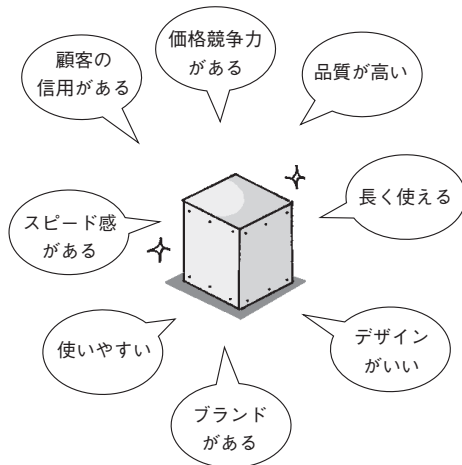


図3 投入労働力の削減・効率化【例】



図4 生産性向上取り組みポイント

